

実践報告

「ラーニングマップ」を活用した総合的な学習の時間の一考察

立石 耕一*

A Study of the Period of Integrated Study Utilizing the “Learning Map”

Koichi TATEISHI*

【要約】佐賀大学教育学部附属小学校（以下、本校）では、総合的な学習の時間に、各学年における教科の学びと15時間の個人研究（以下、鯨っ子学習）で培われる資質・能力のつながりを明確にする取り組みを行っている。具体的には、各学年の教科等の指導計画を基に、各教科等におけるどのような資質・能力が活用できるのかを「ラーニングマップ」として示す。

【キーワード】教科横断的な見方・考え方、鯨っ子学習、ラーニングマップ

1. 本実践の目的

昨年度の5年時の個人研究（以下、鯨っ子学習）と今年度の鯨っ子学習を比較して、本学級の児童（6年1組35名）は下記のような変容を感じ取っている（【 】は言語能力とその育成方法から）。

- ①文章が短くなって読みやすかったり、分かりやすく画像などを入れたりした。【明確化】【視覚化】
- ②前は自分の意見を優先していたけれど、自分の意見と事実でまとめることができた。【モニターする】
- ③きっかけや見通しをしっかりと持つことができた。【原因結果】
- ④いる情報といらぬ情報を取捨選択することができた。【選択する】
- ⑤昨年は、分かりやすさよりもデザインに目を向けていたけど、今回の鯨っ子学習は分かりやすさにも目を向けて作ることができた。【評価する】【社会言語能力】
- ⑥昨年は、インターネットで調べたことをそのまま載せていたけど、6年生になって、自分で実験をしたり、アンケートをとったりして、自分で調査してまとめることができた。【方略的能力】
- ⑦聞き手がくれた改善点を素直に受け止めた。【評価する】【談話能力】
- ⑧画面だけでなく、見ている人たちの方を時々みながら話すことができた。【談話能力】

上記の①～⑧の変容は、多くの児童で共通の部分でもある。この変容の実感と今年度の取り組みがどのように関わりがあるのか、本稿で整理をしていく。

昨年度の第5学年の研究の課題として、以下のようなものがある。

更に成果を高めるために「鯨っ子学習」で身に付き、発揮される各教科で学んだ力の整理を行い、その育成のために効果的な手立ての洗い出しを「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」の学習過程に対応させながら明らかにしていく必要がある。

昨年度の研究の成果から、「児童自身は各教科での興味・関心に基づく課題を設定し、各教科で学んだ力を生かしながら探究する姿が見られた」とある。課題と比較すると、興味・関心を持って取り組むことにとどまらず、「どのような力」を発揮したのか意識しながら取り組む必要がある。

そこで、①～⑧を見いだした児童の変容を以下の実践を通して示していく。

個人研究において記述と推敲を意識するために、自分の学びを可視化する「ラーニングマップ」を活用した鯨っ子学習を行う。

1 単元の目標（児童の姿）

ア 抽象的な思考が可能となり、全体を把握した上で注目すべき要素を重点的に抜き出し、頭の中で概念化できる。 【読解力の側面】

イ 新たな産物・視点をつくり上げることができる。 【創造的思考の側面】

ウ 一般的な状況に応じて、他者に思いや考えを論理的に伝えることができる。

【他者とのコミュニケーションの側面】

2 単元の計画（令和4年4月～7月実施）

昨年度と同様の鯨っ子学習の流れの中で、ラーニングマップを活用していく（図1）。

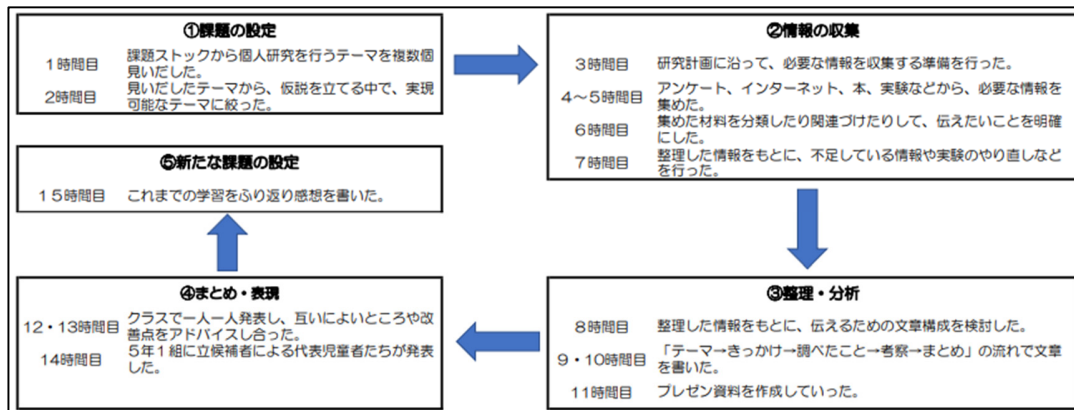


図1 単元の計画

ラーニングマップに関しては、課題の設定の前に、一人ひとりのラーニングマップを作成していくことを伝え、随時、ラーニングマップに追記していくことを確認した（図2）。

鯨っ子学習の中での他教科とのつながりをラーニングマップに追記している児童の中で、次の児童の姿に着目する。

㊦ 5年時の鯨っ子学習からの質的な変容を実感している。

㊧ ラーニングマップへの追記内容に効果的な「場面」と「有効性」を実感している。



図2 単元終了時の全児童のラーニングマップ

3 抽出児のプロフィール

5年時の鯨っ子学習から、それぞれ異なる困り感を見いだしている児童を3名抽出していく。

表1 抽出児のプロフィール

A児	B児	C児
聞いている人が分かりやすいか。ソフトの使い方が分からないときがある。	紙面に情報を詰め込み過ぎていないか。まとめる力。	グラフや思考ツールを使えるようになりたい。

2. 「アカデミックライティング」指導における単元の展開と抽出児の様子

1 学習課題設定場面における抽出児の様子

図3は、A児の単元終了時のラーニングマップである。課題設定場面では、課題ストックに「夏季五輪と冬季五輪での競技の知名度」「なぜメダルの色は金銀銅なのか」の課題から、前者に絞っている。絞った際の理由は、調査の仕方インタビューにより結果を得られやすいという見通しからであった。また、5年時からの変容として、「話題（流行）」に目を向けて課題設定できたことを述べている（マップにメディアの情報と追記）。

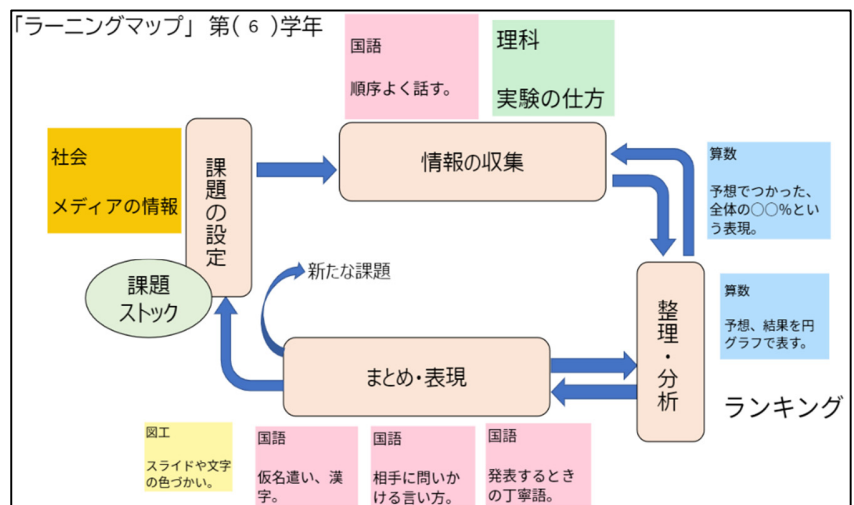


図3 A児のラーニングマップ

図4は、B児の単元終了後のラーニングマップである。課題設定場面では、課題ストックに「サイコロの目の削られ具合がどう影響」「円周率はなぜ3.14なのか」「円柱の1/3の体積が円錐は本当なのか」の課題から、「サイコロ」に着目している。理由は、認知度である。これは、5年生への発表ということであり、5年生が分かる課題を選択している。変容としても、みんなが知らないことではなく、知っていることを深く調べたと述べている。

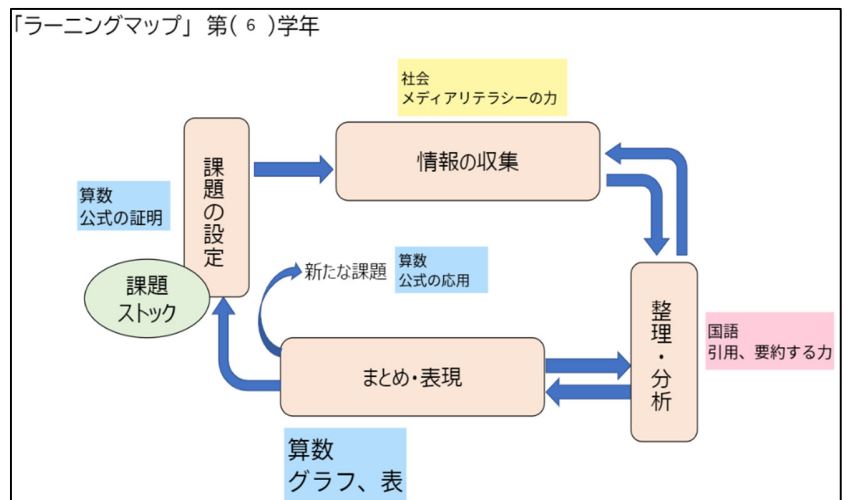


図4 B児のラーニングマップ

図5は、C児の単元終了後のラーニングマップである。課題設定場面では、課題ストックに「ユニバーサルデザイン (UD) について」「お金の秘密」「計算の秘密」の課題から、「UD」に絞っている。絞った際理由は、3年時の特別支援学校との交流から、自分たちが見えていない部分があるのではないかと問いを持ったことと述べている。ラーニングマップには、社会での人のかかわりと追記している。

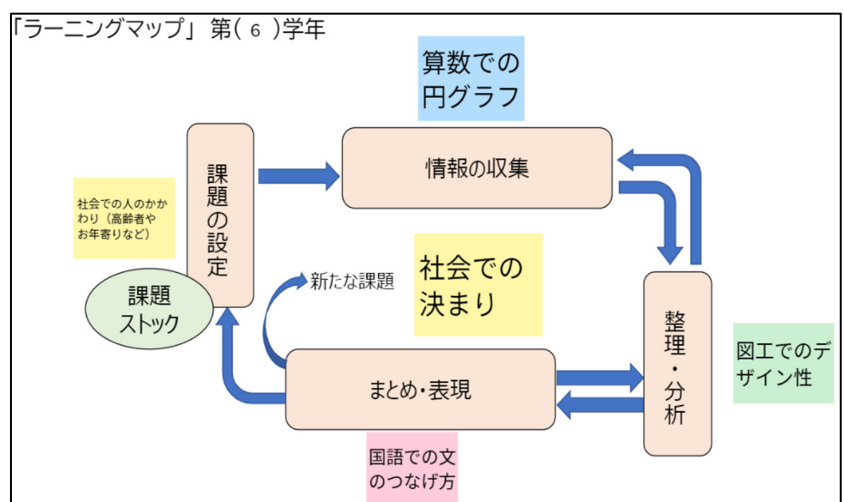


図5 C児のラーニングマップ

2 情報の収集・整理及び分析場面における抽出児の様子

A児は、ラーニングマップにまとめることで、他教科とのつながりを意識することができたよさを述べている。具体的には、スライドに円グラフを取り入れた際に、算数とのつながりを意識することができたと述べている(図6)。この円グラフの挿入は、5年時には未習であったが、学習したことにより使えるようになったことと、リハーサルの際は、数字だけであったが、再度見直す中で、円グラフにした方が分かりやすいと気付き変更している。また、「順序よく話す」では、ごちゃごちゃ話しても聞き手が分かりにくいためと述べ、国語とのつながりを実感していた(図3)。

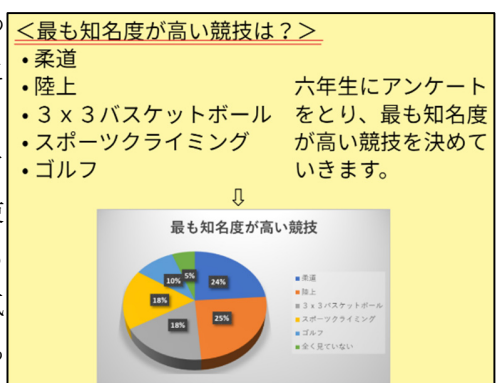


図6 A児の情報の整理

B児は、ラーニングマップのよさとして、全体の流れが分かることを述べている。また、情報の収集・整理及び分析場面で、メディアリテラシーの力と追記しているが、サイトによって記載されている内容

が違うことを実感し、取捨選択する力の大きさを感じた」と述べている。図7は、B児の実験結果を示す表である。この表は、リハーサルでのアドバイスをもとに、大きくしたり、赤を入れたりして、より分かりやすくなる工夫がされている。

	1が出た回数	2が出た回数	3が出た回数	4が出た回数	5が出た回数	6が出た回数
乱数1の回数(回)	18	10	8	25	20	17
乱数2の回数(回)	15	16	18	16	14	18
乱数3の回数(回)	19	17	16	12	15	18
300回出した結果(回)	52	43	42	53	49	53
サイコロ1の回数(回)	28	13	16	20	14	9
サイコロ2の回数(回)	13	24	17	16	11	19
サイコロ3の回数(回)	13	19	17	14	14	23
300回振った結果(回)	54	56	50	50	39	51

図7 B児の情報の整理

C児は、自分のラーニングマップを見直して、理科の実験での検証のよさを追記したが、自分自身、まだ使えていないので追記していないと述べている。また、5年時からの変容として、調べた結果から、すぐに考えを書いていたけれど、理由や分析を踏まえて1段階深く書くことができた」と述べている。

3 まとめ・表現場面における抽出児の様子

A児は、図3で図工とのつながりも意識している。具体的には、スライドや文字の色使いについてである。これは、最初は、まとめを全て大切であるということから赤色にしていた。しかし、リハーサルにて、他者からのアドバイスで「さらに大切な部分のみを赤にした方が見やすい」と言われ、修正したことで、自分の中で見やすくなったと実感したことから、ラーニングマップに追記している(図9)。

B児が述べる5年時からの表現力の向上として、イラストや画像の挿入、文字の大きさの工夫を上げていた。さらに、これまでは、一つの話題の中で、急に他の話題を入れていたが、一つの話題を深めていくようにつなげていくようになったと述べている。図10は、B児のまとめである。数学的確率と統計的確率に関しては未習のため、誤差の範囲の扱いは不十分な部分もあるが、現地点でできる分析を述べる事ができている。

C児は、ラーニングマップのまとめ・表現の部分で、国語での文のつなげ方と追記している。これは、言葉をつなぐときに、聞き手にどうしたら分かりやすくなるのかを意識した際に気付いたと述べている。また、リハーサルの際に、見出しと本文の違いを出した方がいいというアドバイスをもらい、文字の大きさや書きぶりを修正している(図11)。

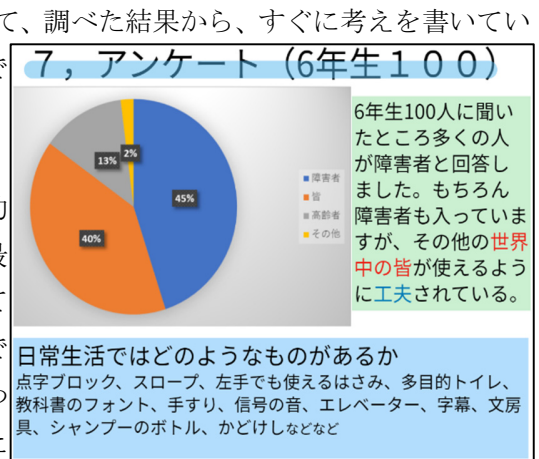


図8 C児の情報の整理

<まとめ>
夏季オリンピックの競技の知名度は、予想以上に**高く**、冬季オリンピックの競技の知名度は、予想以上に**低かった**。つまり、冬季オリンピックの競技より夏季オリンピックの競技の方が知っている人が多い事が分かった。その訳は、**自国でオリンピックが開催されたから**だと考えられる。

図9 A児のまとめ

まとめ
サイコロの目が彫ってあることで、出てくる目に偏りがあることがわかった。けど、本当に2と5が出やすいわけじゃないということがわかった。また、乱数にも偏りがあったから、出し方によって違うのかもしれない。
～完～

図10 B児のまとめ

8, まとめ
ユニバーサルデザインは**誰でも使える**もので、7つの原則があり障害者は45人で1番多く、多目的トイレや点字ブロックなど**身近なもの**が多かった。また、1963年に作られたノーマライゼーションの考え方が広まったので、1980年代にアメリカで生まれた。ユニバーサルデザインは**私たちも使っている**ことが多い

図11 C児のまとめ

3. 実践の整理

図12は、5年生に発表した際に、自由記述で5年生が参考になったと感じた部分を整理したものである。「実際の写真を使って説得力を出していた」「アンケート結果からさらに詳しく説明している」「問いかけながら話している」などが参考になったと書いている。これは、発表者全体に対して書かれていることが多く、研究の流れが分かりやすく、聞き手も理解しやすい構成が共通できていたことを示している。

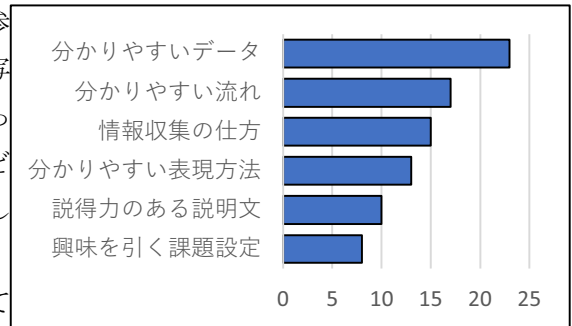


図12 参考になった点（5年1組31名）

以下に、本実践を通しての成果と今後の展望を示す。

1 実践の成果

- ・ 自らの学びの足跡をラーニングマップに追記することで、深いサイクルを生み出していた。
- ・ ラーニングマップを活用することで、研究全体の流れをクラス全体で共有することができ、互いにアドバイスしやすい状況をつくり出すことができた。

2 今後の展望

個から全体のラーニングマップへと整理することで、さらに、ラーニングマップの活用法を探る。

4. 参考文献

○佐賀大学教育学部附属小学校（2022）「学力向上のための基盤づくりに関する調査研究」